

車を購入した。日本の豊かな税制のおかげで、自家用車でも農場使用目的で認められれば、その車の購入代金は税の控除を受けられるのだからありがたい。だからと言って、センチュリーやベントレーだとその控除扱いになるのは難しいが、冠婚葬祭経営であれば、キャデラック、ロールスロイスなどは税の控除に該当するらしい。

## 7人乗りで四駆の日本車

購入した車はSubaru Ascent（アセント、上昇という意味）、良い名前ですね。話的にはこうだ。一昨年の2020年の2月に乗っていた5・3リットルV8シエビーのAWD（4輪駆動）が入らなくなり、FR（後輪駆動）車になってしまった。さー大変だ。この北海道で4輪駆動車でないということは無意味なチャレンジではない。もつとはっきり言えば生死を決める行為でもある。この4輪駆動でなくなったV8シエビーに10年以上乗っているが、まだ愛着はある。ただ駆動装置を修理するとなると30万円くらいになるという見積もりが来た。さすがに乗用車の10年以上の使用はリスクが高いので修理は諦めた。

そこで新車の同じGMのV8を捜した。あるわ、あるわ、金さえ出せばいくらでもある。その提示された金額は、私が10年前に購入した時のザックリ2倍だ。考えて見ると、ここにもアメリカの経済がある。アメリカは90年からおよそ2倍の給与水準になっているが、日本は10%程度？のアップ。これでは普通のアメリカ人が購入できる豊かさを日本人は享受できないことになる。日本も軽いインフレと所得倍増を早く目指しましょう！

妻は「今度は日本車にしないとだめだ！」と言うので、7人乗り、4輪駆動となるとトヨタのランクルになる。当時農場にはランクル70が2台あった。丈夫で維持費のかからない4輪駆動車だが、3台ともランクルかくで、ほかを捜した。ワンボックスは趣味ではないし、時速200kmには興味はないが加速の良い車種にしたかった。そんな折、スバルがテレビで

左ハンドルの“日本車”を買いました！

Vol.165



宮井能雅

1953年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

「2030年に死者ゼロを目指す」とCMで言っていた。あと10年でどう

やって交通事故をなくすんだ？と、イブカシク思った。そういうえば、スバルにはアイサイトなる安全運転支援装置が付いていることは知っていた。やっぱりこれからは止まる車だなど、とりあえず頭の整理棚に置いた。

3年前のある夜に東京のロシア大使館の裏から品川

オレにも  
言わせる！

北海道長沼発  
ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

までタクシーを使った。不思議な現象が起きた。交差点で右に曲がると普通、体は遠心力で左に傾くが、そうならない。交差点を曲がるたびに体が傾かないのだ。

さすがに運転手さんに聞いた。

「この車クラウンですよ？ なんでロール（傾く）が少ないんですか？」。すると、意外な答えが待っていた。「この車、スバルのB4レガシーなんです」。私はずきりクラウンだと思っていたのでびっくりした。これも知っている人は知っているが、クラウンの車内スペースは、トヨタでも格下のカムリやスバルB4レガシーよりも狭い。この時点で金払って小さいクラウン購入は消えた。

運転手さんは「4輪駆動で、水平対向エンジンは良いですよ」と、のたまう。水平対向エンジンね、そういうえば自分も操縦する飛行機のエンジンもアメリカ製の水平対向エンジンだったなと、共通点を思い出した。そこで妻の指示どおり、**国産車スバルで7人乗り、AWD、アイサイトを捜したら18年くらいから販売していない**。5人乗りでは小さいので、さー困った。やはり金髪・ブルーアイが作ったGMシェビー

になるかと、いろいろネット検索してみた。その結果、アメリカ製Subaru Ascentがヒットしたのだ。

## ゲテモノか、良い車か!?

ただ40年間トヨタに乗っているし、故障率、安全、安心にどっぷりつかって、他車に移りするのは禁断の果実をもぎ取るようなものだった。それに今でも言われるのが、「**えースバル?**」。まるでゲテモノでも扱ような目線で言われることが多い。

よく考えれば、スバルの起源は先の戦いで活躍した中島飛行機にある。当時は三菱より多くの零戦を作り、隼、疾風、呑龍や火龍と呼ばれるジェット戦闘機などの航空機やエンジンを作り、日本を守るために敵と戦った。戦後は富士重工となり、ロケット、ヘリコプターの製造などを行っている。つまり、いつも死を隣り合わせにモノづくりをしている会社だからこそ、テレビで30年に死者ゼロを目指すとCMで言えるのだろう。

そうなるかと決断は早い。埼玉・南浦和の輸入自動車販売店に連絡を取り、20年3月に契約、7月納車となった。引き取り時に靖国

と千鳥ヶ淵に行き、その中間にある、戦後の1972年に120万ドルの賠償金を要求した多くの裏切りヨーロッパの代表といえるイタリア文化会館で、「ドロボー金返せー!」と叫んで通行人をビビらせ、大洗からフェリーに20時間乗って、北海道に帰ってきた。

**良いですね**、この車は走行中の前車との距離を保つてくれる。そしてガツンと急ブレーキではなく、スムーズに一時停止したのちに、自動発進もしてくれるのだ。どうも気温が0度以下になると車間距離を多くするような設定になっている。まだある。前だけではなくバックする時も障害物があると緊急停止してくれる。車線の維持もハンドルがやってくれたら、死角になる隣後ろの車線から来た車はドアミラーが警告を示してくれたりする。ルームミラーも、満席になったら車両後方は見えなくなるが、後方カメラが付いているのでルームミラーに映るハイテク装置付きなのだ。

まだまだある。前席と後席のシートには熱線つきで、暑いときはシートが送風される。ハンドルにもヒーターがあり、USBが4カ所、アメリカの家庭用の120

Vコンセントまで付いている。

エンジンは水平対向2・4リットルしかない4気筒だが、ターボが付いているので260馬力あり、車重は前に乗っていたGMシェビーの285馬力よりも200kg軽いので加速は良い。燃費もGMシェビーの6・5km／リットルから8・5に上がり、お財布にも優しい車になった。

AWD（4輪駆動）だが、スタックした時に2輪駆動にしかない、ナンチャッテ4輪駆動ではない。雪道でスタックした場合でも4輪がそれぞれ計算して駆動するので雪道に強いです、と言われたので実験してみた。自宅には4輪駆動のトヨタ・カムリがあり、ある時に倉庫前の積雪30cmでスタックしてしまった。同じ場所をSubaru Ascentで走行すると難なく脱出することができた。

この車で北海道に戻った時に、妻に「SUBARU買ったから」と伝えた。SUBARUのエンブレムを見て納得したのに、なぜか雲行きが怪しくなってきた。妻曰く、「**なんでハンドルが左に付いてるの?**」。私はウソをついていない。「**日本ブランドを買ったんだ**」。